



「わたし」とは何か

「わが心よ」

わが心よ。 おまえはどうして
無益な境地に進んで 少しの落ち着きもなく
そわそわと 静かでないのか。
どうして
わたしを迷わせて いたずらに ものを集めさせるのか。 …①

おろかな心よ。
おまえは わたしを様々な道に みちびいた。
わたしは これまで
つねに おまえに従って そむくことはなかった。

しかし。
いまや わたしは 仏の教えを聞く身となった。 …②
ところが、いま
どうして またふたたび
この世の利欲と 栄華にひかれて
動きまわろうと するのか。

これまで わたしは
おまえの思うとおりに 動いてきた。
しかし、これからは
おまえは わたしの思うとおりに 動かなければ ならない。 …③
われらは ともに 仏の教えに従おう。 …④

こころよ。
この世の どこに楽しみを求めることが できようか。
教えに したがって
速やかに さとりの岸に 渡ろうではないか。 (パーリ・長老偈註)

①…集めるもの。宝物や、答えようのない問題意識など。

こころはいろいろ気にする。「死んだらどうなるのか」・釈尊の教え
武宮礼一師の教え「死んだら拝まれる人になります。あなたにその覚悟ありや」

②…世の中の3つの団体

- 1、権力や財力のそなわった指導者がいるためにあつまった団体
- 2、ただ都合のためにあつまって、自分たちに都合よく争わなくてもよい間だけ
続いている団体
- 3、教えを中心として和合を生命とする団体（サンガ）
 - ・互いを光りとして見出す
 - ・こころの凹凸を平らにして和合させる力
 - ・本尊が安置される⇒三宝が形成される。サンガ（同朋）とは、教えを通して
のなかま。法が説かれ、その法を聞法という形で聴く場。釈迦と阿弥陀とど
ちらが上か？⇒上も下もない。本願なしに釈迦はない（唯説弥陀本願海）。
また釈迦が南無阿弥陀仏を説かなければ本願（阿弥陀）はない。同朋会とい
うのは、これと同様。同朋として出遇う。つどいが同朋というに相応しい。
同じ教えを聞き、同じ高さで出会えているか。それが問われる場。＜四衢亮・
2020年2月熊本教区報恩講法話＞

③…自灯明

④…法灯明

○「わたし」とはどのような存在（生き物）なのか

わたしという存在は、わたし自身のものだと思いがちです。たしかにこれが
「わたし」だと主張している自分がここにあります。

しかし、自分の考えでこの世に生まれてきた者など一人もいません。「自分だ
け」の思いで生きている者もいません。気がつけば、この世に生まれてきた自分
がいて、不可思議にもこの世で生き続けている自分が「ここに」いるのです。
にもかかわらず、自分は「自分のもの」と思い続けています。仏教ではこれを「我
執」と教えます。

自分にとらわれ、こだわっている自分があるに過ぎないのです。

釈尊が教えを残されたということは、私たちにとってどういう意味があるの

でしょうか。それは、本当のわたしに出遇ってほしいという願いが、ほかならぬこのわたしに差し向けられているということでしょう。そしてその願いがすでに成就していることを知らせ、わたしは、その「ねがい」を受けた「いのち」を生きている存在なのです。

それなのにわたしは、勝手に誤って主張する「わたし」にこだわり、私物化して本当の「わたし」から目を背け、「わたし」を見失っているのです。

□古田和弘『涅槃経の教え』(同朋選書)。(菊池が要約している。)

○「わたし」というものは…

穢を捨て浄を欣い、行に迷い信に惑い、心昏く識寡なく、悪重く障多きもの
(『教行信証』総序・149)

○生きるよろこび

「ああ、弘誓の強縁、多生にも値いがたく、真実の浄信、億劫にも獲がたし。たまたま行信を獲ば、遠く宿縁を慶べ。

(『教行信証』総序・149)

▲「念仏とは自己発見の道である」(金子大栄)

「おおよそ大信海を案ずれば、貴賤・縑素を簡ばず、男女・老少を謂わず、造罪の多少を問わず、修行の久近を論ぜず」

(信巻・236)

「男女・老少」というと、いつ死ぬかわからんのはみな同じ(生死不安)だと言われる。そうに違いないけれども、生死不安より、「愛と憎しみとの悩み」を感じずにおれない。

「われわれは人生の片隅にいるような生活をしておる」ような気分である。特に年寄ると「おり場所」がない。寺の本堂だけは年寄りの場だとお年寄り皆そう考える。その年寄りばかりの場へ顔を出すのはいやだと青年は言う。男のおる場所へは女が出られないし、女のおる場所へは男が出られない。ということから、ひがんだり、ねたんだりせねばならなくなる。

老少善悪みな同じように、広々した場所はないものか。

○お浄土とは

*安養浄土の莊嚴は 唯仏与仏の知見なり 究竟せること虚空にして
廣大にして辺際なし

(天親和讃・490)

お浄土には中心があつて円周がない。お浄土とは面白いところで、真ん中はあるけれども片隅がない。

⇒あるのは中心のみであり、際というものが無い世界。だから女人成仏の願とは、そのまま男のための本願となる。女が救われなければ男が救われることはない。女だ、男だというとらわれから離れられることが願われている。

浄土という場所では、万人が皆一つに帰し、そこへ行けば仏は仏であることを、往生人は往生人であることをわすれ、同じ心になって融け合う。悲しみの解消される場所。そういう場を私たちは願わずにおれない。

自分がどういう存在であったのか、心静かに思い出させる場所である。

(金子大栄「救済」を参考にしている。『経説の妙好人』所収)